

# 中・上級台湾人日本語学習者によるテイタの習得に関する研究

許 夏珮

## 要 旨

今までの習得研究ではテイルだけを扱っており、学習者のテイタに関する習得状況は明らかにされていない。本稿では、日本と台湾で学ぶ中・上級台湾人日本語学習者を対象にし、今までの習得研究で指摘されていなかったテイタの習得状況を集団テスト法で検証した。その結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 学習環境の違いがテイタの習得に影響を与えている。
- 2) 日本で学ぶ学習者におけるテイタの習得順序は「性状（＋可変性）」「運動の持続（＋長期）」「繰返し」「運動の持続（－長期）」「結果の状態」「性状（－可変性）」「直前までの持続」「感知の視点」「同時性」「運動効力」「状態の変化」である。
- 3) 習得順序に関し、台湾の学習者は「運動の持続（－長期）」「感知の視点」「同時性」の3項目において日本の学習者と異なる傾向を示している。

【キーワード】テイタ、中・上級台湾人日本語学習者、集団テスト法、学習環境、習得順序

## 1. はじめに

テイタは学習者にとって習得されにくいと指摘した研究があるが、あくまでも推測に留まっている（寺村 1984、工藤 1995）。テイタはテイルの単なる過去形であるということ以外の要素が付加されているにも関わらず、日本語教育の現場ではテイルの過去形としか教えられていない。テイタは「持続」を表すアスペクトの機能と「過去」を表すテンスの機能が共存しており、学習者にとって認知的負荷が重いことが運用の困難さの要因として考えられる。

本稿では、集団テスト法<sup>(註1)</sup>の「文法テスト」を用いて、日本と台湾にいる中・上級台湾人日本語学習者の 11 項目のテイタに関する習得順序を明らかにする。

## 2. 研究目的

本研究の目的を次の3点にする。

- (1) テイタの習得順序を検証する。
- (2) 学習環境、日本で学ぶか台湾で学ぶかにより、テイタの習得順序にどのような差が生じているかを明らかにする。
- (3) 中・上級台湾人日本語学習者がテイタを誤用する原因の一つとして、

中国語の影響を検討する。

### 3. テイタの意味項目、テイタを構成する三要素及び中国語のアスペクト標識

#### 3-1 テイタの意味項目

テイル形には非過去のテイルと過去のテイタがある。許(2000a)では、「運動の持続(±長期)」、「性状(±可変性)」、「繰返し」、「結果の状態」、「状態の変化」、「経歴・経験」(注2)をテイル形の意味項目とし、学習者の自然発話におけるテイルのプロトタイプ性を論じている。本稿では、許(2000a)で扱ったテイル形の8項目にテイタ独自の3項目を加え、計11項目をテイタの意味とする。テイタ独自の意味は以下の3項目である。

##### (1) 直前までの持続

例1: (山下さんは道で偶然田中さんに会って)

山下: ちょうどよかった。田中さんに電話しようと思っていた。

テイタは発言の直前まである動作や状態が持続過程にあったことを表す場合がある。これには、話し手に対する聞き手の発言、あるいは、話し手の発言そのものによって、その持続過程が終わるものが多い。「直前までの持続」を過去における「運動の持続(±長期)」とも考えられるが、敢えてテイタの一つの項目として取り上げるのは、その運動が発話時点の直前まで持続しているためである。言い換えれば、「直前までの持続」を表すテイタは、過去における「運動の持続(±長期)」より過去に対する心理的距離が短いと考えられる。

##### (2) 同時性

例2: 山下: どこに行っていたの? 3度も電話したのよ。

田中: ちょっと近くの公園を散歩していたの。

テイタには、一つの動作が進行しているときに、ある状態がそれと同時に存在していることを示す場合がある(許2000b)。テイタのこの「同時性」の意味も過去における「運動の持続(±長期)」として考えられるが、二つの動作、あるいは状態が同時に起こるのはテイルの「運動の持続(±長期)」には備わっていない性質であるため、「同時性」をテイタの意味項目の一つとする。

##### (3) 感知の視点

例3: (日記文) 今日A社の面接に行ってきた。さすがに緊張した。でもそれは誰も同じことだ。一緒に試験を受けに行った山下などもずいぶん緊張していた。ああいう場では、落ち着こうと思えば思うほどあせってしまう。

学習者にとって混乱しやすいタとテイタの使い分けにムードに関する表現が挙げられる。藤城（1996）は「他人の心理体験を、外から感知できる範囲で捉えて描写している、ということを表すマーカーとして、シテイタ形が機能している」と述べ、「感知の視点の有無によるシタ（ル）とシテイタ（ル）の使い分けには、ムード的な要素が絡んでいるということを示している」と指摘している。本稿では、藤城の観点を入れ、「感知の視点」をテイタの意味の一つとする。

### 3-2 テイタを構成する三要素

許(2000a)では、「持続性」「現在性」「運動性」という三つの要素が典型的なテイルを形成しており、学習者は3要素が揃っている「運動の持続（±長期）」の意味から習得し、そして、その典型的な意味を中心に、テイルの他の意味を学んでいったと結論づけている。テイルの「現在性」はあくまでも発話時の現在をさしているのに対し、テイタの使用には時間軸におけるさまざまな視点の移行がある。たとえば、テイタは発話時の直前までを指す場合（例1）もあれば、遠い昔のある時点（私は十年前北海道に住んでいた）や他の運動と同時に起こった過去のある時点（例2）を指す場合もある。テイタではテイルにおける「現在性」のかわりに、「過去における現在性」が要素となる。したがって、テイタを構成する要素は「持続性」「過去における現在性」「運動性」の三つと考えられる。

### 3-3 中国語のアスペクト標識

アスペクト表現は中国語では動詞の形を変化させず、動詞を前後から包み込むアスペクト助詞によって表す。主なアスペクト助詞は動詞の前にくる“在／正（在）”と動詞の後にくる“了”“著”“過”が挙げられる。

- ① “在／正（在）”は動作・作用が以前から始まっており、その時も継続中であることを表す。過去のある時点を表す時間副詞がある場合はテイタに相当するが、そうでない場合はテイルに相当する。

例： 他“正在”看电视。                      彼はテレビを見ている。

他昨天8点“在”看电视。                      彼は昨日8時にテレビを見ていた。

- ② 動詞の後に“了”がついた場合は、日本語ではタに対応する場合が多いが、テイルとテイタの両方に対応することもある。ただし、テイルとテイタの表現で“了”にあたる表現は、多くの中国語母語話者にとって「完了」の認識が強いので、日本語のタと同様に解釈されやすい。

例： 他買“了”五本书。                      彼は本を五冊買った。

会議開始“了”

会議が始まった／ている／ていた。

- ③ “著”は主に動作または状態の持続を表し、テイルと対応している。過去を表す時間副詞がある場合はテイタと対応する。

例： 電燈亮“著”。

電気がついている。

我一開門、外面正下“著”雨。 ドアを開けたら、雨が降っていた。

- ④ “過”は経験相を表し、タコトガアルと対応している。

例： 他去“過”非洲。

彼はアフリカに行ったことがある。

以上のことから、“了”に当たる日本語の表現は台湾人学習者にとって混乱しやすいと考えられる。

## 4. 研究方法

### 4-1 対象

実験の対象者は日本で学ぶ台湾人日本語学習者（以下、「日本の学習者」と略す）49名、台湾で学ぶ台湾人日本語学習者（以下、「台湾の学習者」と略す）67名である。学習者のレベルを判断するため、許（1997）と同じクローズテストを行った。このクローズテストで60%以上正解した人を中級レベルに達していると判断する。日本と台湾の学習者の平均正答率は87%、85%であるため、学習者はほぼ同じレベルであると考えられる。

### 4-2 期間

1999年7月～9月

### 4-3 調査の手順

文法テストの調査文を次の手順で作成した。まず、日本語教科書や漫画からテイタの表現をとりだし、文脈の分かる会話文や独話文に変える。次に、文中のテイタが出現する部分を空欄にし、動詞の基本形だけを与え、その動詞を使って適当な形に変えるように指示を与えた。一つの調査文につき、30人の日本語母語話者に答えてもらい、テイタしか回答されなかったものを学習者に対する本調査の調査文にした。本調査の調査文は、意味分類の1項目につき2文ずつ、合わせて11項目の22文である。なお、被験者にテイタに関するテストであることをさとられないように、テイルやタを使わなければならない文脈で構成された3つの問題も含め、合わせて25文とした。

## 5. 結果

テイタの各項目に関し、2問とも正答すればその項目が習得されていると判断し、その人数の割合の比較によって習得順序を明らかにした。許(2000a)では

日本の学習者を対象にテイタの習得順序を論じている。本稿はテイタの習得順序を検証する際、日本の学習者の人数の割合が大きい順に項目を並べ、表 1 と図 1 を作成した。

表 1 2 問とも正答した人数の割合

学習環境 テイタの意味	日本 総数 100% (49 人)	台湾 総数 100% (67 人)
性状 (+ 可変性)	63% (31 人)	24% (16 人)
運動の持続 (+ 長期)	43% (21 人)	24% (16 人)
繰返し	39% (19 人)	21% (14 人)
運動の持続 (- 長期)	39% (19 人)	3% (2 人)
結果の状態	22% (11 人)	12% (8 人)
性状 (- 可変性)	18% (9 人)	6% (4 人)
直前までの持続	18% (9 人)	6% (4 人)
感知の視点	18% (9 人)	3% (2 人)
同時性	16% (8 人)	0% (0 人)
運動効力	12% (6 人)	6% (4 人)
状態の変化	0% (0 人)	0% (0 人)

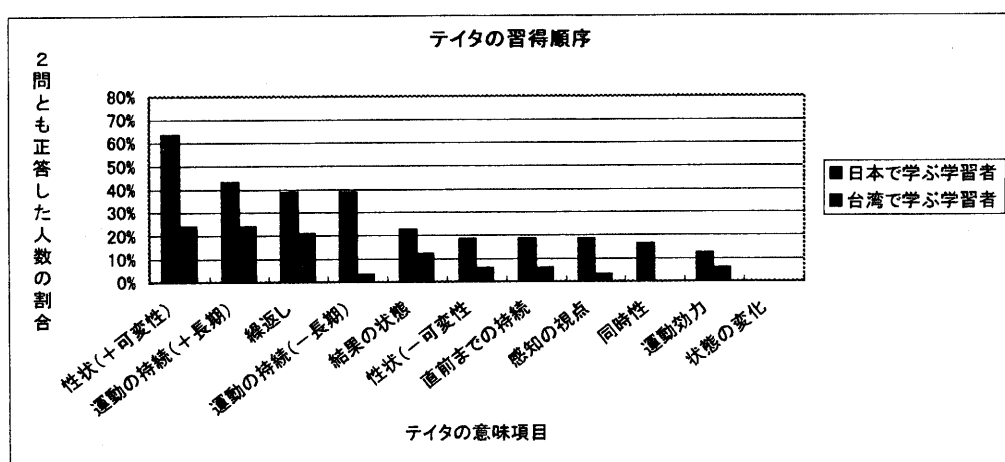


図 1

図 1 の日本の学習者を基準としたテイタの習得順序に照応すると、台湾の学習者は日本の学習者に比べ、全体的に 2 問とも正答した人数の割合が低く、特に「運動の持続 (- 長期)」「感知の視点」「同時性」の 3 項目において異なった順序を示している。

## 6. 考察—テイタの 11 項目の習得順序

ここでは、テイタにテンスが加わったこと、つまり視点が過去に移ったことが、どのようにテイタの習得に影響しているのかを 3-2 で述べたテイタを構成する三要素 (以下 A) および 3-3 で述べた中国語の影響 (以下 B) という二つ

の観点から考察していく。

### 一、「性状（＋可変性）」

日本語	(1) 台湾の淡水川は今はきれいですが、昔は <u>汚れていました</u> よ。	(2) 山下：王さん、昨日外国人登録はすぐできましたか？ 王：いいえ、行ってみたんですが、とても <u>混んでいました</u> よ。3時間もかかりました。
中国語	台灣的淡水河現在很乾淨、不過以前很“ <u>擠</u> ”。	山下：王同学、昨天外国人登録很快就辦好了嗎？ 王：沒有、我去了、可是很“擠”。花了三個小時。

A－テイタの「性状（＋可変性）」はものの性質、状態を表し、変化の時点が明らかではないため、「持続性」なしでは考えられにくい。日本の学習者は台湾の学習者より正答率が高いのは「汚れていた」「混んでいた」の持続性を強く意識しているからだと推測できる。

B－中国語では“擠”と“擠”という形容詞の標識が見られ、その語彙の持つ意味がすでに状態を表しているため、「性状（＋可変性）」が台湾人学習者にとって理解しやすいと考えられる。

### 二、「運動の持続（＋長期）」

日	(3) 彼女は去年まで、十年間日本に <u>住んでいた</u> 。それなのに、北海道に行ったことがなかった。	(4) (会社で) 山下：うちの会社に入る前は <u>何をしていた</u> か。 田中：名古屋の貿易会社で <u>事務をしていた</u> 。
中	到去年為止、她已經“住”在日本十年了、可是却没有去過北海道。	山下：你進我們公司前是“做”什麼的？ 田中：我在名古屋的貿易公司“做”業務。

A－「運動の持続（＋長期）」に関して、「持続性」「運動性」は強いが、視点の移行がはっきりしないため、「過去における現在性」は少し弱くなっている。許（2000a）で明らかにしたように、テイルの「運動の持続（＋長期）」は初級レベルにおいて既に習得されている。基礎力のない初級学習者は「住んでいる」「仕事をしている」のような定型表現を暗記することによって使えるようになる可能性が高ければ、中・上級学習者にとってはその過去形である「住んでいた」「仕事をしていた」の使用も困難ではないと考えられる。そのため、習得順序として早い段階に現れると推測できる。

B－中国語では、動詞の“住”と“做”につくアスペクト助詞が見られず、中国語の“了”や“過”による誤解が生じないと考えられる。

### 三、「繰返し」

日	(5) 私はアメリカにいた時、プールで毎朝5時から6時まで <u>泳いでいた</u> 。	(6) (昔の写真を友達に見せて) この頃、私は卓球部に入っていて、毎日3時間練習していた。
---	--	---

中	我在美国的时候、每天早上5点到6点在游泳池“游泳”。	這個時候、我有加入桌球隊、每天“練習”3小時。
---	----------------------------	-------------------------

A-(5)(6)の「繰返し」は「動作継続」の「繰返し」であるため、「持続性」が強い。また、テイタは運動動詞についているため、その「運動性」も強い。しかし、これは過去のある時間幅において運動が反復するものであり、視点のほうが少しあいまいになる。そのため、「過去における現在性」は少し弱くなると考えられる。(5)(6)に時間の幅を示す表現が入っているため、学習者にとって「持続性」と「過去における現在性」が意識されやすかったと考えられる。

B-中国語では、学習者の混乱を招くようなアスペクト助詞がついていない。

#### 四.「運動の持続（一長期）」

日	(7) 山下：おや、黒田さんがいませんね。 どうしたんでしょう。 田中：きっと、まだ会社でしょう。 急ぎの仕事があるみたいです。 よ。きのうも、遅くまでやっていたから。	(8) 山下：どこに行っていたの？3度も電話したのよ。 田中：ちょっと近くの公園を散歩していたの。
中	山下：奇怪、黒田先生不在。他怎麼了。 田中：一定還在公司吧。他好像有緊急的工作要做。昨天他也“做”到很晚。	山下：你去哪裏了？我打了三次電話給你。 田中：我去附近的公園“散步了”

A-テイタの「運動の持続（一長期）」において、「持続性」「運動性」は強く、「過去における現在性」は少し弱くなっている。(7)には「遅くまで」という時間の幅を示す副詞がついているため、学習者がその「持続性」を意識し、正答率も高かった。それに対し、(8)には時間の幅を提示するものがないため、学習者は「持続性」を意識しなかった可能性が高く、正答率も低かった。

B-図1から分かるように、「運動の持続（一長期）」に関して、台湾における正答した学習者の割合が明らかに下がっている。(7)を正答した学習者でも(8)を間違えていることがデータから観察された。同じ「運動の持続（一長期）」を表すのに、(7)と(8)の正答率にかなりの差が現れたのは中国語による影響が大きいと考えられる。(7)の動詞“做”にはアスペクト助詞がついていないのに対し、(8)の動詞“散步”には完了を表すアスペクト助詞“了”がついている。中国語で(8)のような文脈を考えると、「持続性」の意味合いはなく、過去の運動が起きた事実を述べているのみである。中国語と日本語では持続に対する捉え方が違うため、意識しないと中国語の考え方に引きずられる可能性があると思われる。日本の学習者はテイタの「運動の持続（一長期）」の意味が自然に身につについていて、中国語の“了”にあたる概念を対照させていないと推測されるが、日本語に接する機会が少ない台湾の学習者は中国語に影響されやすく、その分、習得に困難が生じると考えられる。

## 五.「結果の状態」

日	(9)山下：彼女は独身ですか 田中：まあ、独身と言えは独身だけど、前は結婚していたよ。	(10)山下：今年のキャンプ大会はいつですか。 田中：さあ、わかりません。でも先週まで、留学生新聞に国際交流キャンプの記事が出ていましたよ。
中	山下：她单身嗎？ 田中：說單身是單身、不過之前“結過婚”。	山下：今年露營大會是什麼時候？ 田中：我不知道。不過上星期的留學生報都還有“登”國際交流露營的報導。

A－「結果の状態」は、ある過去の出来事が終わって、その変化の結果がある状態として一定の期間に残っていたことを表す。状態の持続を表すため、「持続性」が強い。しかし、運動は過去のある時点に終わったため、「運動性」がないといえる。「過去における現在性」については視点の移行が明示されないため弱くなる。(9)と(10)に「結婚した」「出た」と答えた誤用の割合が高かった。それは学習者が「結果の状態」における「持続性」が理解できず、過去なら過去の出来事としてしか考えていないことを示唆している。

B－中国語訳について、(9)の“結過婚”の“過”はタコトガアルという意味にあたるため、学習者のデータに「結婚したことがある」という答えが見られたのは中国語のこの発想によるものだと考えられる。一方、(10)の“登”(「(記事を)のせる」「(記事が)のる／出る」の意味)にはアスペクトの標識が見られない。「出た」にしても「出ていた」にしても、中国語としては同じく“登”で表現することができるため、「出た」という学習者の誤用はテイタの「持続性」に対する認識が不足していることが原因ではないかと考えられる。

## 六.「性状（－可変性）」

日	(11)子供の時、私の家と学校はだいぶ離れていました。ですから、毎日学校へ行くのが大変でした。	(12)彼女の歌のうまさは子供の時から目立っていた。
中	小時候、我家和学校“離得很遠”，所以每天去学校都很辛苦。	他唱歌好聽從小就很“引人注目”。

A－テイタの「性状（－可変性）」は形容詞的になっているとはいえ、状態を表すことで「持続性」が存在すると考えられる。また、「過去における現在性」の視点は(11)においては「子供の時」という明示された時間の幅にあり、(12)においては「子供の時から」という開始時点を示した時間帯に移ったのである。「離れた」「目立った」と答えた学習者は「持続性」が意識できず、そして、「離れている」「目立っている」と答えた学習者は視点が過去に移ったことが理解できなかったためと考えられる。

B－中国語ではアスペクトの標識が見られないが、文脈から過去の出来事であると分かるため、タを誤って用いたことが考えられる。



## 七.「直前までの持続」

日	(13)(山下さんは道で偶然田中さんに会って) 山下：ちょうどよかった。田中さんに電話しようと思っていた。	(14) (電話で) 山下：早くからごめんね。もしかして寝ていた？ 田中：ううん、大丈夫。
中	山下：太好了、我“正想”打電話給你。	山下：這麼早不好意思。你“在睡覺”嗎？ 田中：沒關係。

A－「直前までの持続」はテイルが表せないテイタの独特の意味である。「直前までの持続」は「持続性」が強いが、その持続過程が話し手の発言によって終わるという特徴を持っている。「過去における現在性」に関しては発話時点の現在に近い場合、視点もわずかな距離しか移行しない。視点の移行を意識せず、過去より現在のほうに関心がむいている学習者は、「直前までの持続」の運動が発話の現在も進行しているものと捉え、テイタをテイルに間違えたと推測できる。

(13)(14)には、過去の運動が完了したことを表す「思った」「寝た」を使った学習者も少なくなかった。それは、「直前までの持続」において、学習者は過去というテンスの概念を持っているが、持続というアスペクトの概念を持っていない、「持続性」を無視したからだと考えられる。

B－中国語のアスペクト標識について、(13)には“正”、(14)には“在”が見られた。“正”と“在”は両方とも動作の進行を表すアスペクト助詞であり、(13)(14)の文脈において、現在進行していることに着目している。この“正”と“在”の影響で、日本人が「直前までの持続」と認識している状況は中国語母語話者にとって過去の意識が薄く、発話時の現在と直結している認識が強い。そのため、テイルを誤って用いる可能性が高く、習得が困難になるといえる。

## 八.「感知の視点」

日	(15)息子：お母さん、明日までにバザーに出すものを持って来てくださって、先生が <u>言っていたよ</u> 。 母：ああ、そうだったわね。来週バザーね。	(16) (日記文) 今日A社の面接に行ってきた。さすがに緊張した。でもそれは誰も同じことだ。一緒に試験を受けに行った山下などもずいぶん緊張していた。ああいう場では、 <u>落ち着こうと思えば思うほどあせってしまう</u> 。
中	兒子：媽、老師“說”明天之前要把拍賣的東西帶來。 母親：啊、是啊。下星期要拍賣。	今天去A社面試。真的很緊張。不過每個人都一樣。一起去的山下他們也很“緊張”。在那種場合、越想鎮靜就越焦躁。

A－「感知の視点」に関しては、第三者の運動を客観的に捉え、たとえ一瞬の動作でもテイタが使われるため、「持続性」をほとんど実現していない。そして、時間軸上の視点の移行がはっきりしないため、「過去における現在性」も弱いと考えられる。それに対し、運動を捉えたものが多いため、「運動性」が強い。「言っていた」「緊張していた」と答えた学習者はテイタのこの特殊な意味を意識し

て使ったことがフォローアップインタビューで分かった。

Bー中国語では、自分の場合も第三者の場合もアスペクト標識がついておらず、“了”や“過”による誤解が生じない。しかし、文脈から過去の出来事と分かるため、「完了」の意味として捉え、タを使用したと考えられる。

図1から分かるように、台湾の学習者は「感知の視点」において異なる順序を示した。日本語能力が同程度の学習者がこのような差を示したのは学習環境によるものだと考えられる。実際、正答した日本の学習者を調べたところ、普段日本人と接する機会が多いか、よくテレビを見るかどちらかであることが分かった。日本人が使っている表現をよく耳にするため、学習者は自然に第三者の運動を客観的に捉えるテイタが使えるようになったのではないだろうか。自然な日本語がインプットされる機会が少ない台湾の学習者の多くは「感知の視点」のテイタが理解できず、過去の出来事としてのみ捉えていると考えられる。

#### 九．「同時性」

日	(17) 山下：阪神大震災の時、あなたはどこにいらっしゃいましたか。 田中：地震が起きた時、私たちは大和旅館に泊っていました。	(18) 山下：どこに行っていたの？3度も電話したのよ。 田中：ちょっと近くの公園を散歩していたの。
中	山下：阪神大地震的時候你在哪裏？ 田中：地震發生的時候、我們“住”在大和旅館。	山下：你“去”哪裏“了”？我打了三次電話給你。 田中：我去附近的公園散步了。

Aー「同時性」に関しては、視点の移行が明示され、「過去における現在性」は強い。「同時性」が示す同時というのは、運動あるいは状態（(17)では「泊まる」、(18)では「行く」）が持続している中で、他の出来事（(17)では「地震が起きる」、(18)では「電話する」）が起こるということである。この場合、主となる運動あるいは状態の視点は他の出来事が起こった時点に移行されるため、その運動あるいは状態が持続しているかどうかということがあまり問題にされていないと考えられる。そのため、「持続性」が少し弱くなるともいえよう。

(17)の「泊まっていた」と正答した学習者の割合は(18)の「行っていた」より高かった。学習者が「泊まっていた」と理解できたのは、「地震が起きた時」という出来事の発生時点、つまり視点の移行が明白に示されているからだと思われる。それに対し、(18)の誤用のほとんどは「行った」である。それは学習者が視点の移行を意識せず、更に中国語の影響も受けているためと考えられる。Bー(17)の「泊まっていた」に相当する“住”にはアスペクト助詞がついていないが（“住在”の“在”はここではアスペクト助詞ではなく、「～に泊まる」の「に」に当てはまる助詞である）、(18)の「行っていた」に相当する“去～了”

には動作の完了を表す“了”が用いられる。(18)の文脈において、山下が3回電話した時と同時に行われた田中の「行っていた」という動作は中国語の考え方からすれば単なる過去の出来事にすぎない。台湾の学習者は中国語の“了”に強く影響され、ほとんど「行った」と間違えているため、「同時性」の習得順序が日本の学習者と異なる傾向を示したと考えられる。

#### 十．「運動効力」

日	(19) 去年の試合で彼に負けてから、ずっと今度こそ勝とうと思っていたが、また彼に負けてしまった。	(20) きこのう、会場についた時、講演会はもう始まっていた。
中	去年比賽輸給他以後、一直“想”這次一定要贏，不過還是輸了。	昨天到會場的時候、演講會已經“開始了”。

A－「運動効力」は運動の後続段階を捉えるという点では「結果の状態」と共通するため、「持続性」が強い。また、視点の移行が明示されていないため、「過去における現在性」は弱い。「運動性」は動詞の性質により強くない。

「思った」「始まった」と誤って使用した学習者は、設定時点よりさらに過去の出来事時点に起きた動作の持つ効力性が理解できず、過去の出来事としてのみ捉えていると考えられる。

B－中国語では、(19)にはアスペクト標識がないのに対し、(20)には完了を表す“了”が見られる。“了”が表す動作の完了は過去の事実に着目しており、動作が起きたあとの状態や効力などには着目していない。「始まっていた」及び「始まった」については、その区別がつかない中国語母語話者にとって、中国語の“開始了”というアスペクト助詞“了”が表す動作の完了の意味につられて「始まった」を用いたのであろう。

#### 十一．「状態の変化」

日	(21) 三年ぶりに姉の子供に会ったら見違えるほど大きくなっていた。	(22) きこのう多摩川に遊びに行った。忘れ物をしたので、一度家に帰り、また多摩川へ戻ってみると川の水位が上がっていた。
中	三年沒見、姐姐的小孩“長大了”、幾乎讓人認不出來了。	昨天去多摩川玩。忘了帶東西、所以回家拿。等我再回到多摩川的時候、河川的水位已經“上漲了”

A－「状態の変化」は均一した運動や状態が持続しているのではなく、どの時点を見ても前の時点と違う状態を示す変化が連続しているものである。そのため、状態の「持続性」が弱くなる。また、時間の幅が広く、「過去における現在性」は弱い。さらに、目に見えない変化は「運動性」が弱い。

テイタの11項目の意味において、「状態の変化」が一番正答率が低かった。ほぼ学習者全員に「大きくなった」「上がった」という誤用が見られた。それは、

学習者にとって、過去の状態変化が持続しているという認識がなく、過去の動作が完了した現在の事実だけを捉えているからではないかと考えられる。つまり、テイタの「状態の変化」に備わっている「持続性」「過去における現在性」を無視したためだと推測できる。

B-(21)(22)において、テイタは両方とも中国語の“了”に相当する。日本の学習者も台湾の学習者も、「状態の変化」を表す2問とも正答したものがいなかった。学習者が「大きくなっていた」「上がっていた」のような状態変化の意味が理解できず、ただ「大きくなった」「上がった」という変化の達成しか考えていないのは中国語の“了”に強く影響されているためだと考えられる。日本語のインプットが多い日本の学習者にとっても、「状態の変化」が習得できなかったのは、「大きくなったね」といったような目の前にある現象を耳にしているため、「状態の変化」における「持続性」が意識できなかったためだと推測できる。

## 7. おわりに

本稿では、テイタを構成する三要素「持続性」「過去における現在性」「運動性」に対する学習者の認識、および中国語の影響の2つの観点からテイタの習得順序を調査した結果、次のようなことが明らかになった。(1)学習環境の違いがテイタの習得に影響を与えている。(2)習得順序に関して、台湾の学習者は「運動の持続(一長期)」「感知の視点」「同時性」の3項目において、日本の学習者と異なる傾向を示している。(3)学習者の誤用の原因として、テイタを構成する「持続性」「過去における現在性」を意識しなかったことと中国語の“了”に影響されたことが考えられる。

## 注

- (1) Dulay, H., Burt, M., and Krashen, S. (1982) は「集団テスト法による研究は、異なる言語発達段階にいる多くの学習者を対象にするので、時間の経過に沿って、諸々の発達の実際を調査するのと同じである」と述べている。
- (2) 許(2000a)では、「その本なら、一度読んでいるよ」のような文をテイル形の一つの意味として取り上げ、「経歴・経験」と呼ぶことにした。しかし、工藤(1995)は、同じ用例を「後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存」というパーフェクトの概念の一つとして捉えている。この概念を応用し、過去のテイタを考える場合、テイルにおける「後続時点の現在」も過去に移行する。つまり、このようなテイタは「過去のある後続時点に及ぼす、それ以前に成立した運動の効力」であると考えられる。そこで、テイ

ル形の意味の一つである「経歴・経験」という用語を「運動効力」に変更する。

#### 参考文献

- (1) 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95号 pp.37-48 日本語教育学会
- (2) \_\_\_\_\_ (2000a) 「自然発話における日本語学習者による『テイル』の習得研究－OPI データの分析結果から－」『日本語教育』104号 pp.20-29 日本語教育学会
- (3) \_\_\_\_\_ (2000b) 「テイル形における基準時間の設定に関する考察」『人間文化論叢』第二巻 pp.99-107 お茶の水女子大学
- (4) 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』 ひつじ書房
- (5) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版
- (6) 藤城浩子 (1996) 「シテイタのもう一つの機能－感知の視点を表すシテイタ－」『日本語教育』88号 pp.1-12 日本語教育学会
- (7) Dulay, H., Burt, M., and Krashen, S. 1982. *Language Two*. Oxford: Oxford University Press. (牧野高吉訳 1984 『第2言語の習得』 弓書房)